

地域活性化という「遊び」⑦

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

なぜ、一流の田舎を捨てて
三流の都会になるのか？



自分たちで作った竹の器でカレーを食べます。お肉はもちろんイノシシ！



ご飯はもちろん羽釜で炊きます。電気釜と食べ比べも

「わたしたちのふるさと、なくなっ
ちゃったんですよ」
数年前の夏
農場に響く子供たちの元気な声と蟬せみ

の合唱の中
楽しそうにカレーを食べながら
一人の子供が
何気なく漏らした言葉が
今も忘れられない。

東日本大震災以降
福島原発事故の影響で県外移住を
余儀なくされている子供たちに
遊びに来てもらって
のびのび遊んでもらおうと
三和町有志の主催で開催される
サマーキャンプ。
一週間の滞在中みわダツシュ村にも
毎年遊びに来てくれます。
受け入れを始めた当初は
力が入りすぎて考えが及ばず
のんびりしてもらはずが
逆に子供たちを忙しくしてしまった
こともありました。
それを打開するヒントになったのは
先述の子供との会話でした。

筆者プロフィール
1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。



↑竹を切ってきてカレー皿や水筒、このあとの川遊びで使う水鉄砲など作ります

←ノコギリなんかの刃物の扱いに慣れていないうちの子供たちや地元の子供たちもボランティアで参加。子供はすぐに仲良しになります

「どんなところだったの？」
 「山があつてね 川があつてね 田んぼがあつてね ここみたいなのここ」
 その瞬間
 そうだ！
 この子たちのふるさとを作ろう！

体の中を電流が駆け抜けました。
 この子たちが欲しがっているのは大人があれもこれもと考えるおもてなしではなく
 もっとシンプルで根元的なもの。
 大人はあれがないとダメなんじゃないか

こうじゃないと
 楽しくないんじゃないか
 それを楽しむ理由は？
 などとすぐに考えたがりますが子供はもっと単純に楽しめます。
 楽しい理由は楽しいから
 好きな理由は好きだから。

僕はうちの農場に遊びに来てくれた子供たちが
 その辺の草をとってきてはヤギにやるというとても単純な遊びを
 親がもういいだろうという言葉を完全に無視して
 何度も何度も
 本当に楽しそうに繰り返す姿を見てこれこれ
 これでもいいんだよなと
 いつもニコニコしてしまいます。
 デイズニールランドも
 ユニバーサルスタジオも
 川遊びも虫取りもヤギの餌やりも子供にとっては横並びでどれも楽しい。

■

地域活性化のヒントも
 こういうところに隠れています。
 田舎における地域活性化というのは田舎が都会みたいになることとは違ふと思います。
 賛否両論の末
 三和町は平成の大合併で



町長に談判に行った村長。田んぼで野球をすることもあります

福知山市になりましたが
 その際
 みわダツシユ村の村長が三和町長に「三和町は一流の田舎を捨ててなぜ三流の都会になるのですか」と談判に行ったそうです。
 当時僕はまだ
 三和町にいませんでしたが
 この言葉は僕の中で
 村長の名言中の名言。
 現状の過疎のままでもいいということではなく
 田舎と都会では
 発展の方向が違っているのでは？
 ということだと思えます。

■

田舎では都会に憧れる若者はまだまだ多いですが
 移住者としては
 地元の人が見えない地元の良いところが見えることも多いので
 都会もいけれど田舎もいよと
 田舎と都会を横並びに考えることを
 伝えていきたいと思えます。